カントの根源悪概念に関する係争モデル

中山　弘太郎（慶應義塾大学文学研究科後期博士課程）

「人間は生来悪である」という『たんなる理性の限界内の宗教』における根源悪の理論は、その理解をめぐって解釈上の論争の的となり続けている。カントがいかなる意味でこうした大胆な主張を行い、またどのように正当化を与えているのかは未だ明らかではない。

根源悪の理論は、相互に干渉し合う四つの要件の全てを両立させなければならないという解釈上の要求が存在するゆえに困難を抱えている。四つの要件とは悪の普遍性、悪の帰責性、悪の根絶不可能性、そして回心の可能性である。根源悪の理論は「どんなによい人間のうちにも前提できる」（VI:33）という悪の普遍性を主張する。それにも関わらず、その根源悪そのものは自由な選択の結果とみなされ、「つねに自ら責めを負っていなくてはならない」（VI:32）という帰責性を問われるものである。さらに一方では、こうした根源悪は「人間の力で根絶することもできない」（VI:37）という意味で根絶不可能性を備えてもいる。他方でこの根絶不可能な悪に対して、「自分の力でこの革命を成就して、自らよい人間になる」（VI:47）という道徳的回心が可能でなければならない。こうした四つの要件を見るならば、少なくとも普遍性と帰責性、根絶不可能性と回心の可能性がそれぞれ相互に干渉しており、何らかの解釈上の解決を必要としていることは明らかである。

本発表もまた、根源悪の理論の理解と正当化という古典的なテーマを主題とする。根源悪をめぐっては、さまざまな解釈上の戦略が提案され、かつ解釈史の整理も繰り返し与えられてきた。有限な理性的存在者としての人間の構造から根源悪の存在にアプリオリな正当化を与えようとする解釈と、観察可能な道徳的に悪い行為の存在からアブダクションによって悪の普遍性を支えようとする経験的解釈を両極としつつ、根源悪の存在を道徳的改善のための統制的理念とみなす解釈、人間の心理学的制約に注目する解釈など、読解の幅はきわめて多様である。さらに、近年の洗練された諸解釈が悪への性癖と悪い心術の区別を導入することから、選択肢は複雑化している。

本発表は現存する根源悪解釈がその多様性にもかかわらず、ある理解を共有しているということを指摘した上で拒絶し、新たな解釈上の戦略として「係争モデル」を提案する。アプリオリな解釈、経験主義的解釈、統制的解釈、心理学的解釈の全ての解釈は、いずれも「人間的行為者のもつ心術が（たんに一般的あるいは普遍的に）現実的に悪であるということを私たちが知っている、あるいは想定している」という根源悪の理解を共有している。私はこの共有された理解を拒絶する。本発表が新たに提案する係争モデルは「認知的に入手可能なすべての証拠に基づく限りで、人間的行為者のもつ心術が悪であるという暫定的な係争上の推定が常になされる」という主張として根源悪を理解する。他のすべての解釈が行為者のアプリオリな構造や悪事の経験的事例を心術の悪の現存在に対する直接的な根拠とみなすのに対して、係争モデルはそれらすべてを、心術における悪という最終的な有罪判決を「より説得的なものにする」係争上の証拠として理解するのである。

本発表が予定する構成は以下の通りである。まず、『たんなる理性の限界内の宗教』において展開された、諸格率と単一の心術からなる行為者の基本構造と性癖概念に関する簡単な導入を行う。続いて、現存する種々の解釈に対する批判的なサーベイを行い、現存する解釈の背景にある解釈上の直観を引き出すとともに、各々の解釈の抱える問題点を整理しよう。こうした分析からは上述した共通点もまた、析出されることになるだろう。最後に本発表は独自の根源悪理解として係争モデルを提出する。私は近年の洗練された諸解釈と同様に類における性癖と個体における心術という区別を採用する。この区別のもとで、係争モデルは類のレベルにおける悪への性癖の経験的推定と個体の心術のレベルにおける係争上の推定という二重の推定によって特徴づけられることになる。こうした係争モデルによる根源悪の解釈は現存するいかなる読解よりも、物自体の不可知性という超越論的観念論の根本テーゼに忠実に、かつ哲学的にも整合的な理解を新たに示すことになるだろう。